

<2024年度研究助成選考に当たって> 総評

今回も、一般18件、若手13件の応募をいただき、厚く御礼申し上げます。若手の応募が、若干ではありますが増加したことは、選考委員一同、好ましい変化と捉えております。

本研究助成は、その成果が、日本の安心安全に繋がることを目指していることはいうまでもないのですが、社会学、心理学、教育学、都市工学、犯罪学など、「安心安全」を構築する諸科学の研究の発展に寄与できるということも、非常に重要なことと考えております。若手研究者への助成を重視する姿勢も、もとより、そのような発想に基づくものです。

今回の応募も、現在の日本の「安心安全の課題」に対応するものでありました。特に、広い意味でのダイバーシティの視点、具体的には、性被害・性加害や外国人非行、さらに、従来から一貫して着目されてきた少年非行問題、児童虐待問題の応募もかなり見られました。すべて、的確な問題意識に基づく、時宜に合ったご研究対象だったと評価しました。応募された書類を精査させていただきましたが、研究方法も、それぞれの専門分野が求める水準を超えたものでありました。

ただ、今年の特徴は、特に一般助成に関する応募に、新規性、調査への意欲が読み取りにくいものが多いと感じられました。また、従来の研究の蓄積の焼き直しに近いものも見られました。その結果、一般助成は1件に抑え、若手助成を4件選考させていただきました。

財団の財政状況等により、助成の枠を大幅に拡大はできないものの、助成の総額を、若干拡大できるというご提示をいただき、合計5件の選考ができましたことは、今後の「上昇傾向」に繋がるという期待も込めて、非常によろこばしいことと考えております。

今回も、最終的に選考された研究に比較しても、研究レベルとしては同等のものが、含まれておりましたことを、申し添えます。

現在、社会の構造、それに伴う安心安全の課題はどんどん変化しており、その速度は、今後ますます上がると思われまます。新たな課題に対応した解決策に繋がる研究に助成することの必要性は高まりますが、それ以上に、新しい視点・方法から課題を見出し、対応策を構築していく「人材」の育成も肝要です。その意味では、今回の応募では、サイバーに関する領域やAIを用いた安心安全研究が若干増えましたが、次回の助成に際しましては、領域と手法の、一層の拡大を期待いたしますとともに、それに対応しうる助成枠の設定に努めて参る所存ですので、積極的な応募を期待いたします。

選考委員長 前田雅英